

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380693

研究課題名(和文) 日本「農村社会学」の再検討 ポスト「家・村」理論の構築に向けて

研究課題名(英文) Reconsideration of Development Processes of Japanese Rural Sociology

研究代表者

矢野 晋吾 (YANO, Shingo)

青山学院大学・総合文化政策学部・教授

研究者番号：00344341

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：戦前期の「農村社会」を対象とした諸研究を検討することにより、農村社会学の実践性、国際的生成、広域性(移動性)、調査方法の多角性・学際性、時代性などを抽出した。具体的には、社会学以外の分野も含めた当時の「農村社会」研究群を網羅的に再検討した。その結果、1920-30年代の農村社会研究は、当時の時代状況を背景に、隣接他分野及び海外の研究動向の影響をも受けつつ、次第に有賀喜左衛門・鈴木榮太郎の「農村社会学」へと向かっていった状況を明らかにした。

文献研究と並行して、有賀・鈴木の関係者へインタビューを実施し、記録をまとめた。加えて、有賀喜左衛門旧邸より、未発見の資料群を発見し、現在、分析を行っている。

研究成果の概要(英文)：Through the reexamining rural studies from Meiji era to 1930's, we provided some findings. Japanese Rural Sociology has established, influenced by some academic fields of study such as agriculture, economics, folklore, also by rural sociology in Europe and America. Then, the studies converge within the Japanese Rural Sociology established by Kizaemon Aruga and Eitaro Suzuki.

We had interviews with some rural sociologist concerned by Kizaemon Aruga and Eitaro Suzuki, and are making the reports. Through the process of research, we found new documents owned by bereaved family of Kizaemon Aruga in his former residence in Zushi, Kanagawa prefecture. The materials are now being organized.

研究分野：村落社会学・農村社会学・地域社会学

キーワード：社会学 農村社会学 村落社会学 学説史

## 1. 研究開始当初の背景

現代日本の農山漁村地域は、かつてない社会環境の変化に直面している。そのなかで、改めて農山漁村の実態を把握・分析を行う枠組み問い直し、従来の日本「農村社会学」の理論的革新が求められる時代となっている。

日本社会学史において、「農村社会学」は、戦前期に有賀喜左衛門、鈴木栄太郎を中心に学問的基盤が確立されたとされる(似田貝1973)。それが、有賀の「同族団」の理論及び、鈴木の「自然村」の理論であり、両者を総称していわゆる「家・村理論」と呼び、基本課題として日本農村社会学の発展に大きな指針となった。ところが近年、社会環境の急変により、既存の枠組では農山漁村を理解することが困難になってきている。

こうした現状を踏まえ、本研究グループは2009年から、日本「農村社会学」確立期以前の業績の再検討を開始した(2012年度日本社会学会大会報告)。同時に、「農村社会学」成立のプロセスの分析も行ってきた。

このように、従来の「農村社会学」の研究課題・手法を、その前史より再検討し、学問体系確立の中で捨象された課題や分析手法について再評価し、現代農山漁村研究への新たな分析枠組みを提示することが急務であった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、従来の日本「農村社会学」の研究課題・手法を、その前史より再検討し、学問体系確立の中で捨象された課題や分析手法について再評価し、今後の日本農山漁村の実態を把握し分析を行う枠組みを提示することである。そこで4つの課題を設定した。(1)有賀・鈴木が「農村社会学」を確立する「前史」を再検討し、当時の問題関心、分析手法などを抽出し分析を行う。明治期以降の研究を対象に、グループの5人で分担し、学際的な学問交流の中から生まれた農村社会学の草創期を学問形成史、人脈形成史を意識しな

がら検討する。

(2)有賀・鈴木が「農村社会学」を確立する以前と途上における問題関心、「農村社会学」へと収斂したプロセスの解明。草創期の研究者から教えを受けた農村社会学者に対する聞き取りを実施し、社会的な系譜や発想のみならず隣接分野との学問的接点や人的接触についても情報を得る。加えて、彼らのモノグラフとその対象地を再度検討する。

(3)上記2課題を踏まえ、明治以降の農山漁村における社会学的研究の課題と視点を整理し、現代及び今後の農村研究への新たな課題と分析枠組みを提示。あえて農山漁村を対象とした広範な分野の古典研究を積み重ねることで、現代直面する目先の課題からは見えない潜在的な課題をも抽出する。

(4)聴取調査で得られた資料は、将来の研究者が活用できるアーカイブ化を目指す。最終的にはウェブページなどでの公開を目標とする。文献資料も同様に整理し公開を行う。

## 3. 研究の方法

課題(1)は、移動については井森陸平、農業経済学の野尻重雄、俯瞰的視野は、新渡戸稲造の地方学、柳田国男の郷土研究、竹内利美による小学生の地域調査、持続性は、柳田国男や農村社会学者、林政学、法社会学の林野研究等を再検討する。加えて、政策との関連を追究した那須皓、小河原忠三郎などの「農村社会学」のタイトルを持つ著作群も検討する。課題(2)は、有賀・鈴木・竹内・田辺寿利に直接の指導を受けた、柿崎京一、笹森秀雄、藤木三千人らの諸氏への聴取調査、有賀・竹内らが依拠した岩手県旧石神村や信州の村落を対象に現地調査を行う。(3)は、都市農村関係、人口問題との関係、郷土教育との関係、雑誌等のドキュメント分析からみた農村への関心などを発掘し、再検討する。(4)は、公開及びアーカイブ化に向けた資料収集及び方法の検討を行う。

#### 4. 研究成果

(1)戦前期の諸研究を検討することにより、農村社会学の実践性、国際的生成、広域性（移動性）、調査方法の多角性・学際性、時代性などを抽出した。

(2)従来の「農村社会学」で検討されてこなかった研究群を再検討したことで、これまで見落とされていた見地を明らかに出来た。有賀・鈴木以前に実に多様な農村社会の研究が行われていたことを示した（下記3~6）。

(3)新渡戸稲造の主著で、日本農村社会学の先駆的業績と位置づけられる『農業本論』の再検討を通じて、先行研究で論じられていなかった点、特にモノグラフ研究法の手法と全人的な農民把握、に注目し、彼の思想の特質と農村社会学上の先駆性を明らかにした。彼の「地方学」の背景には、平等な人間観で農民を全人的に把握する姿勢が存していた。地方学の構想、都市工商業との関係、農工商鼎立併進論の志向は連関しており、新渡戸農業論を、いわゆる内発的発展論の系譜に位置づけることは可能で、彼のいう「地方学」は、日本農村社会学のモノグラフ研究の系譜に位置づけられる点を指摘した。

(4)新渡戸と同様に、研究者として取り上げられなかった実業家・渋沢栄一の農村への関わりや岡田温の農村調査論、岡田の前提になっている「村是」などのさまざまな調査論なども検討し、研究者にとどまらない「農」という観点から歴史的検討を行なった。

(5)大正期に出版された小河原忠三郎『農村社会学』（1917年刊行）、森賢隆『農村社会問題』（1919年）、さらに昭和期初期、1930年前後に続いて発表された農村社会学研究群は、従来、農村社会学研究として評価が低かった。再検討の結果、背景には、当時、日本に強い影響を持っていたジレットらの米国農村社会学が実践的な課題解決を志向していた点があり、米国農村社会学が実践から理論に傾斜したのを受け、人口論及び社会集団といった

課題に関心が移行し、理論的な検証へと傾斜していった。うち社会集団に対する関心は、後の家・村理論へとつながっていった点を指摘した。

(6)竹内利美の研究を再検討した結果、村の小学校の教員の立場から、農村社会と向きあうことを通じて、他の研究者の学問的視点とは異なる視点、つまり、「村の子ども達のこれからの生活をどのようにしていくのか」という実践的かつ具体的な課題を、農村研究に見出したことを指摘した。

(7)これらによって、「農村社会学」の嚆矢を、上記の有賀・鈴木の2人に焦点を限局せず、より面的に捉えたこと、つまり、1920~30年代の大きなうねりのなかで「農村社会学」が勃興してきたことを証明した。

(8)「広狭の領域」論を「農村社会学」の問題の俎上に載せたことによって、農村社会学の生成期に捨象された、（都市農村関係とは異なる）流域や峠が含意する広域性・移動性を再考する必要性について指摘を行った。

(9)「農村社会学」の継承者へのヒアリング。特に有賀喜左衛門の嫡流に位置する柿崎京一氏（1926年生）へのインタビュー調査。柿崎氏は、上記有賀喜左衛門の愛弟子で、有賀社会学の正統な継承者と言ってよい。その柿崎氏に「一農村社会学者の歩み」に関するインタビューを行った。これは、従来の「農村社会学」を知るうえではもちろん、それにとどまらない大きな意義をもつ。1926（大正15）年生まれの氏の歩みはまさしく昭和・平成の歴史であり、「農村社会学者」としての歩みを明らかにすることは、我々の戦前期農村社会学の再検討に不可欠であった。しかも、戦前期に農村問題が集結していた観のある東北地方の農村出身であるがゆえに、「ムラ」が思考の原点であったと語った柿崎氏のインタビュー記録が「農村社会学」の原点に占める意義は大きいといえよう。

(10)有賀喜左衛門旧邸の保存資料の新発見。神奈川県逗子市に住んでいた有賀喜左衛門

が所蔵していた蔵書、ノート、メモ、書簡類等は、その死後親族に伝えられていた。今回、我々の研究途上で、この親族の方々と連絡がついて、有賀の遺した資料群の実物に接し、データを入手することが出来た。これらについては今後の分析を俟つところが大きい。現状でいうならば、従来の完成された形での有賀「農村社会学」を、方法論的な観点から明らかにする可能性が期待できる。とりわけ「農村社会学」構築のうえで大きな意義を有していた岩手県石神村の齋藤家とのやり取りは重要である。具体的に、有賀と、当時の当主齋藤善助および中佐井の郷土史家佐藤源八との往復書簡・調査ノートを解読してみると、これまで有賀単独の調査による著書と思われてきた石神モノグラフが、齋藤・佐藤との往復書簡による調査が大きな比重をしめていることが明らかとなった。このことは、インフォーマントの重要性とともに、石神調査の視点に限定を与えていることを意味する。その意味で、これまで行われていた批判（名子側の視点や、山村の要因が欠落している点等）を裏付けるものである。かかる有賀の保存資料については、詳細な分析は今後の課題であるが、今回の共同研究でこれを見出すことができた意義はすこぶる多大である。何となれば、従来一つの出来あがった学問体系であるかのごとく後世からは考えられかねない「農村社会学」の成り立ちそのものを相対化し得る可能性を含んでいるからであり、さらには生成期社会調査の方法を検討する上で注目される事実だからである。

有賀の新資料は分析中であるが、現段階までに、農村社会学的調査の具体的な生成過程（ないしはインテンシブな調査とエクステンシブな調査の接合過程）を明示した。

(11)日本における「農村社会学」創設者と言って良い鈴木栄太郎についても、有賀と同様に聞き取り調査を行なった。具体的には鈴木

人氏のインタビューを行なった。

(12)上記の(1)～(11)の成果として、2016（平成28）年10月の日本社会学会第89会大会で報告した。そこでは各メンバーが以下のような知見を示した。矢野は、米国農村社会学とドイツの農村社会学の日本的摂取（取捨選択）のプロセスを示した。三須田は、有賀の新資料を通して、農村社会学的調査の具体的な生成過程（ないしはインテンシブな調査とエクステンシブな調査の接合過程）を明示した。福田は、農村社会学の生成期に捨象された、（都市農村関係とは異なる）流域や峠が含意する広域性・移動性を再考する必要性を指摘した。高田は、戦前期の時代状況・時代的要請のなかで試みられた農村調査のいくつかは、農村社会学的調査（インテンシブな村落調査）の源流に位置づけられる点を示唆した。牧野修也（研究協力者）は、竹内利美の研究を再検討し、鈴木・有賀にはなかった「教育（郷土教育）」を通じたローカルな知の継承可能性および農村社会学の実践的意味を指摘した。

以上のように、戦前期における諸研究の検討を通じて、農村社会学の実践性、国際的生成、広域性（移動性）、調査方法の多角性・学際性、時代性などを抽出した。

農村社会学は、戦前期において既に実践性、国際性、広域性（移動性）や調査方法の多角的・学際的側面を見出すことができるものであった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計16件）

1) 福田恵,2016,「近代山村における林業移動と人的関係網 広狭域に及ぶ山村像の把握に向けて」『年報 村落社会研究』52,pp.95-144, 査読有

2) 福田恵,2016,「集落社会における共生の問題系 自然資源と人的移動をめぐる一試論」『共生社会 共生社会をつくる』農林統計出版,pp.201-218 頁, 査読無

- 3) 三須田善暢・林雅秀・庄司知恵子・高橋正也,2016,「資料紹介 石神大屋斎藤家所蔵有賀喜左衛門関係書簡類」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』18,pp. (1)-(20), 査読無
- 4) 三須田善暢・林雅秀・庄司知恵子・高橋正也,2016,「石神調査をめぐる土屋・布施論争について」『村落社会研究ジャーナル』22(2),pp.1-12, 査読有
- 5) 高田知和,2016,「研究ノート 一般の人たちが地域で歴史を書くとき 沖縄県の「字誌」 編集者へのインタビュー」『東京国際大学論叢 人間科学・複合領域研究』1,pp.85-98, 査読無
- 6) 渡部圭一,芳賀和樹,福田恵,湯澤規子,加藤衛拓,2015,「阿仁川上流域における村社会と耕地管理 秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と翻刻」『筑波大学農林社会経済研究』31,pp.1-56, 査読有
- 7) 福田恵,2015,「イノシシと篠山」『成熟地方都市の形成 丹波篠山にみる「地域力」』福村出版,pp.70-71, 査読無
- 8) 福田恵,2015,「書評 細谷昂著『家と村の社会学 東北水稲作地方の事例研究』御茶の水書房,2012年12月」『村落社会研究ジャーナル』22(1),pp.57-58, 査読無
- 9) 高田知和,2015,「地域で地域の歴史を書く 大字誌論の試み」野上元・小林多寿子編著『歴史と向きあう社会学 資料・表象・経験』ミネルヴァ書房,pp.65-82, 査読無
- 10) 高田知和,2015,「当事者にとっての年中行事経験 農村青年の日記を読む(6)」『東京国際大学論叢 人間社会学部編』20,pp.23-43, 査読無
- 11) 三須田善暢・林雅秀・庄司知恵子・高橋正也,2015,「土屋喬雄「石神調査ノート」と有賀喜左衛門モノグラフの比較検討」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』17,pp.119-123: 査読無
- 12) 渡部圭一,芳賀和樹,福田恵,湯澤規子,加藤

衛拓,2014,「阿仁銅山山麓における山村社会の森林資源管理 秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と翻刻」『筑波大学農林社会経済研究』30,pp.1-54, 査読有

13) 福田恵,2014,「越境する山村研究の現在」『村落社会研究ジャーナル』21(1),pp.37-43, 査読無

14) 三須田善暢,2014,「新渡戸稲造農業論の性格と日本農村社会学への示唆」『社会学年報』43,pp.107-117, 査読有

15) 高田知和,2014,「郷里からみた渋沢栄一 歴史と地域社会の一側面」平井雄一郎・高田知和共編著『記憶と記録の渋沢栄一』法政大学出版局,pp.75-105, 査読無

16) 高田知和,2014,「戦前戦中期農村青年の災害経験 農村青年の日記を読む(5)」『東京国際大学論叢 人間社会学部編』19,pp.73-93, 査読無

〔学会発表〕(計18件)

1) 高田知和,「戦前期日本における『農村社会学』の成立・展開過程の再検討(1) 戦前期日本における『農村社会学』の成立・展開過程の再検討」,2016.10.09,九州大学糸島キャンパス(福岡県糸島市)

2) 矢野晋吾,「戦前期日本における『農村社会学』の成立・展開過程の再検討(2) 昭和初期における『農村社会学』著作群を通じて」,2016.10.09,九州大学糸島キャンパス(福岡県糸島市)

3) 三須田善暢,「戦前期日本における『農村社会学』の成立・展開過程の再検討(3) 新資料を踏まえた石神調査の再検討から」,2016.10.09,九州大学糸島キャンパス(福岡県糸島市)

4) 福田恵,「戦前期日本における『農村社会学』の成立・展開過程の再検討(5) 農村社会学の『狭域』化と『広域』論の可能性」,2016.10.09,九州大学糸島キャンパス(福岡県糸島市)

5) MISUDA, Yosinobu, The history of the main Japanese agricultural settlers in Manchuria during

and after World War II, XIV World Congress of Rural Sociology (国際学会), 2016.08.13, Ryerson University in Toronto, Canada

6) 福田恵, 林業移動と人的関係網 山村像をめぐる社会学からのメッセージ, 地理科学学会, 2016.01.21, 広島大学

7) 高田知和, 渋沢栄一の地域づくりと人づくり 郷里へ思いをこめて, 日本文化社会学会 (招待講演), 2015.12.23, 早稲田大学

8) 三須田善暢・林雅秀・庄司知恵子・高橋正也 「書簡にみる有賀喜左衛門調査の特徴: 石神大屋齋藤家所蔵資料から」, 第63回日本村落研究学会大会, 2015.11.07, 岐阜県郡上市和良町 和良町民センター

9) 三須田善暢・林雅秀・庄司知恵子, 岩手県二戸郡石神村における名子制度と漆器業・漆器市場, 市場史研究会 2015 年秋季大会, 2015.11.21, 東北大学大学院経済学研究科大会議室

10) 福田恵, 近代山村における林業移動と人的関係網 広狭域に及ぶ山村像の把握に向けて, 第63回日本村落研究学会大会, 2015.11.07, 岐阜県郡上市和良町 和良町民センター

11) 高田知和, 「招待講演 渋沢栄一の地域づくりと人づくり 郷里へ思いをこめて」 「日本文化社会学会」, 2015.12.23, 早稲田大学

12) 高田知和, 「招待講演 渋沢栄一と八基村 晩年の栄一は郷里にどう関わったのか」 「渋沢栄一講演会」 2015.10.04, 埼玉県深谷市・渋沢栄一記念館

13) Shingo Yano, The Social Characteristics and Current Issues of a Japanese Ecosystem, Work Shop “ Modern Japan: Retrospective 400 Years ”, 2015.02.25, The Edwin O. Reischauer Institute of Japanese Studies at Harvard University, アメリカ合衆国

14) Shingo Yano, “ Settled ” Culture and Social Unit in Japan, Japan Study Group at Harvard University, 2015.03.06, The Edwin O. Reischauer Institute of Japanese Studies at Harvard University, アメリカ合衆国

15) 三須田善暢, 林雅秀, 庄司知恵子, 高橋正也, 石神調査再考: 土屋喬雄の調査ノートを中心とし, 第62回日本村落研究学会, 2014.11.01, 岩手県宮古市グリーンピア三陸みやこ

16) 矢野晋吾, 地域文化の“資源化”と多様化するアクター 諏訪地域における御柱祭の事例, 日本民俗学会第67回年会, 2015.10.11, 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス

17) 福田恵, What is landtenure?, 2014.09.02, ラオス国立大学, ラオス

18) 三須田善暢, 環境問題をめぐる村落の論理および新規農業参入者との関係変化 山形県遊佐町における鳥海山岩石採取反対運動の事例から, 第61回日本村落研究学会大会, 2013.11.02, 福井県越前市越前市生涯学習センター

〔図書〕 (計1件)

著書

1) 福田恵, 2016, 「聚落社会における共生の問題系 自然資源と人的資源をめぐる一試論」 古沢広祐他編 『共生社会 共生社会をつくる』

6. 研究組織

(1) 研究代表者

矢野晋吾 (YANO, Shingo) 青山学院大学総合文化政策学部・教授  
研究者番号: 00344341

(2) 研究分担者

高田知和 (TAKADA, Tomokazu) 東京国際大学人間社会学部・教授  
研究者番号: 70236230

三須田善暢 (MISUDA, Yoshinobu) 岩手県立大学盛岡短期大学部・准教授  
研究者番号: 10412925

福田恵 (FUKUDA, Satoshi) 広島大学総合科学研究科・准教授  
研究者番号: 50454468

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

牧野修也 (MAKINO, Shuya) 神奈川大学・非常勤講師